

Title	有声化現象の切換え : 青森県津軽地方を例に
Author(s)	阿部, 貴人
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 5 p.64-p.78
Issue Date	2003-03
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23218
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

有声化現象の切換え —青森県津軽地方を例に—

阿部 貴人

【キーワード】 有声化現象、内容形態素、機能形態素、切換え

【要旨】

本稿では、青森県津軽方言話者の有声化現象をとりあげ、場面内の切換えについて分析・考察した。その結果、(a) (b) のような言語内的な要因と (c) の言語外的な要因が関連していることが明らかとなった。

- (a) 丁寧形式と有声化現象における有声子音の共起関係によって切換えが行なわれやすい、方言の文構造と有声化現象における有声子音の共起関係によって切換えが行なわれにくい、といった他要素との共起関係と関連した切換えがみられる。
- (b) 機能形態素に比べ内容形態素の方が切換えやすい。
- (c) 発話に対する注意や、発話の直前でのローカルな計画が働きやすい場合は切換えが起りやすい。

1. はじめに

青森県津軽地域では、文法項目のみならず音声・音韻項目も切換えにあずかる言語変項として活用されている。と同時に、当該地域(および東北地方一般)では音声・音韻項目(特に単音レベル)において「共通語化」が進んでもいる。その中で、有声化現象はカジュアルなスタイルでも方言的な特徴が保持されている数少ない音声・音韻項目である。本稿の目的は、津軽方言話者のいわゆる有声化現象の切換えの様相を明らかにすることである。

また、本プロジェクトの概要である渋谷(2002:3)では、方言と共通語といったドメイン間の切換えのほか、ドメイン内での切換えについてもテーゼとしてあげている。本稿に先立つ阿部・坂口(2002)では主にドメイン間の切換えに主眼をおいて分析・考察を行ったが、ドメイン内でどのような切換えが行なわれているのかといった点を明らかにすることも目的とする。

なお、阿部(印刷中)では当該地域の中年層における有声化現象の切換えを分析・考察した。老年層を対象とする本稿では、この中年層の分析と同様の言語内的な環境についても検討し、その異同についても言及する。

以下では、まず§2.で分析資料を示し、§3.で分析項目と切換えの分析に際しての前提について確認する。次に§4.でドメイン内切換えについての分析を行なう。

2. 分析資料

本稿では、以下の二つを分析資料として用いる。

(1) 談話資料

大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のSSコーパス ver. 1.0のうち、青森県津軽地方の老年層（SA）のデータ（ただし分析の中心は津軽老年層との談話、調査者との談話とし、津軽若年層の談話は部分的に用いることとする）を分析資料とする。表1、2にインフォーマント情報と談話情報（阿部・坂口 2002: 12の老年層に関わるデータのみ）を示す。

[表1 インフォーマント情報]

	年齢	職業	居住歴
SA	69	農業	0-: 青森県弘前市
SC	66	農業	0-: 青森県弘前市
YA	23	教諭	0-18: 青森県弘前市 18-22: 東京都 22-: 青森県弘前市
YF	25	学生	0-18: 兵庫県姫路市 18-大阪府池田市

[表2 談話情報]

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老-老	SA-SC	夫婦	31分	SC主導
老-若	SA-YA	祖父と孫	33分	YAが質問、SAが答える
老-調	SA-YF	初対面	39分	YFが質問、SAが答える

(2) 質問調査

SAに対して、SAが談話内で使用した共通語/t/ /c/ /k/を含むすべての語・形態素を、有声で実現することが可能か否かを確認した（以下、内省調査とよぶ）。また、対調査者場面では有声／無声のどちらを使おうとしているか、実際には有声／無声のどちらを使ったと思うかといった意識を尋ねた。

3. 分析対象と前提

3.1. 分析項目と判定方法

本稿における言語変項の対立項は、共通語カ行・タ行における無声子音／有声子音（[k] : [g]、[t] : [d]）の2項対立である。

当該子音の有声／無声の判定は、筆者一名の判定による。共通語に関しては、音響分析によって有声／無声を判断する方法があるが、津軽の子音の音響的特徴が共通語と同様で

あるか否かといった検討が必要であり、今後の課題である。

以下では、対象子音を含む形態素・語を《 》でくくり、同一の形態素・語に対象となる子音が2つ以上ある場合には当該箇所を{ }で示すこととする。

例) 212SA:子供の《と(ぎ)》は やったけど 最近 やらないな一。

3.2. 分析枠

有声化現象は、方言体系においてもいくつかの制約条件によって、義務的に無声子音が選択され、切換えにあずからない場合がある。そこで、本節では先行研究で報告されている制約条件の検討も行いつつ、切換えにあずからない制約条件を整理しておく。

まず、結論から述べると、以下のものは義務的に無声子音を選択され、切換えにあずからない。

- (i) 自由形態素で、かつ内容形態素の頭子音
 - (ii) $[(-)C_1V_N C_2V_W]$ における C_2 という環境 (ただし V_N が無声化している場合)
 - (iii) 促音音素の後
 - (iv) (i) ~ (iii) 以外で SA が有声では発音しない (できない) と回答されたもの
- 先行研究では、方言体系でも有声子音で実現されない制約条件 (= 無声子音が義務的に選択される制約) として、

- (1) 語頭・促音音素の後・撥音音素の後・長音音素の後・ $[(-)C_1V_N C_2V_W]$ における C_2 (ただし V_N が無声化している場合。例えば、「北」「蓋」など。)といった音環境
- (2) 漢語・外来語といった語種
- (3) いわゆる指小辞「コ」や複合語のような形態素の切れ目の後
- (4) 昔は使われなかった(新しい)語・共通語と同形の非日常語といった語彙的事情などが報告・指摘されてきた (井上 1968、斎藤 1992、渡辺 1984 など)。

しかしながら、先行研究では漢語といった語種の制約には例外が多いことが既に指摘されている。また、形態素の切れ目の後といった形態論的性質も多くの例外から制約としては不十分である。本稿では先行研究で指摘されたいくつかの制約条件のほかに、

- (a) 対象となる語を形態素のレベルに分け、さらに形態素を種類別に分類すること
- (b) 言語内的な制約条件以外に、有声で実現が可能か否かといった話者の内省を確認すること

といった二つの観点を加えて分析する。

(a) は、形態素の種類によって切換えが左右されることを指摘している code-switching 研究と関連する。この点については § 4.2.3. でふれる。(b) に関わる問題として、これまでの様々な先行研究や筆者の観察から、話者の内省と実際の運用にズレが見られる場合が少なくないことが問題となる。しかし、SA から有声が不可能であると回答された語・形態

素は、実際の談話でも有声で実現されることはなかった。

先行研究の制約条件に (a) (b) の視点を加えるのは、対老年層場面・対調査者場面のデータから、以下のような結果が得られるためである。

- (1) 自由形態素で、かつ内容形態素の頭子音は有声子音で実現されることがない。
- (2) 母音の無声化に関しては、先行研究と同様に $[(-)C_1V_N C_2V_W]$ における C_2 (ただし V_N は無声化している場合)といった環境では有声子音が現れることがない²⁾。ただし、当該の子音を含んだ音節が母音の無声化を起こしている場合 $([(-)C_1VC_2V_N])$ で C_2 が無声子音、 V_N が無声化)は、母音が無声化したために有声化現象が起きなかったのか、有声化現象が起きなかったために母音の無声化が起きたのかが不明ではあるが、(4)の内省では vsd が可能であるため分析の対象とする。
- (3) 促音音素の後でも例外なく無声子音である。
- (4) 撥音・長音音素の後、漢語(撥音・長音音素の後の場合が多く、どちらの制約条件が関わっているのかが明らかにできない)、外来語といった環境でも、有声子音で発音しないものがある。そこで §2.の内省調査によって、談話に出てきたものに関して、有声子音での実現が可能かどうかを確認した。有声子音での発音が許容されなかったものの多くは、これまで漢語・外来語といった制約で有声化しないといわれていたものであるが、すべて内容形態素の頭子音である。機能形態素は頭子音でも有声が可能なものがあり、漢語や外来語でも内容形態素の頭子音でなければ有声が可能と内省され、実際の談話でも有声で実現されることがある。

このような結果から、以下の分析では上記 (i) ~ (iv) を分析の対象から外す。また、連濁と考えられるもの、直接引用発話も分析の対象外とする。

4. 分析

まず、対老年層場面・対調査者場面における有声と無声の音素別の分布を表3に示す。

[表3 老年層の有声/無声の分布]

	対老年層場面	対調査者場面
有声	33(97.1)	72(33.3)
無声	1(2.9)	144(66.7)
計	34	216

()内は%、縦の合計が100%

表から、SA は対老年層場面ではほぼ有声を使用し、対調査者場面ではカテゴリカルに切替えることはないものの、無声子音の割合が高くなるといった連続的な切替えを行なっていることがわかる。

なお、対 SC で無声で実現された 1 例は、以下のようなものである。

079SA: だって《ことば》《チガッテタ》いな? [だって、ことば(が)違ってたよね?]

結論から述べると、SA の有声化現象の切換えを分析するには以下の視点が必要である。

- (a) 特定の要素と有声化現象の切換えが連動すること
 - (a-1) 丁寧形式と有声子音の共起関係
 - (a-2) 方言的要素と有声子音の共起関係
- (b) 形態素の種類が有声化現象の切換えに関連していること
- (c) 発話に対する注意が有声化現象に関連していること

以下では、丁寧形式の使用と切換えが連動するタイプ (§ 4.2.1.)、方言的要素 (文法形式) の切換え状況と連動するタイプ (§ 4.2.2.)、形態素の種類と関係するタイプ (§ 4.2.3.)、発話に対する注意が関係すると考えられるタイプ (§ 4.2.4.) について詳しくみていくこととする。

4.2.1. 丁寧形式との共起

本節では、丁寧形式が使用された場合には無声子音に切換えやすいことを確認する。

筆者はかつて、津軽地方の中年層を対象として、方言と共通語の文法形式の共起関係について分析を行った (阿部 2001)。結果の概略を示すと、

- (A) 方言形式と共通語形式のすべての共起が許容されることはない。
- (B) しかしながら、ある特定の方言形式/共通語形式の共起は許容される。
- (C) また、ある特定の方言形式/共通語形式は決して共通語形式/方言形式と共起しない。

といったものであった。なお、(B) の許容される組み合わせは実際に談話でも観察され、(C) の許容されない組み合わせは談話でも使用されることはなかった。

内省調査の結果、本稿の対象である SA でも阿部 (2001) による中年層と同様の内省が得られた。具体例として、以下に否定辞と原因・理由の接続助詞の共起の内省を示す。

[表 4 津軽中年層 (阿部 2001) と SA の内省]

	形式	適切性	使用する談話(中年層話者の意識)
方+方	ネーハンデ	○	方言談話のみ
方+標	ネーから	×	方言/共通語どちらも使用不可能
標+方	ないハンデ	○	方言談話なら使用可能
標+標	ないから	○	共通語談話のみ

○ : 許容できる × : 許容できない

分析過程は省略するが、否定辞、原因・理由の接続助詞、アスペクト形式、推量形式、

文末詞等との組み合わせから、それぞれの共通語／方言形式に標識としての役割があるか否か（マーカであるか否か）を分析・考察した（表5の否定辞、原因・理由の接続助詞では「ネ(一)」が方言としての標識を、「から」が共通語としての標識を担うと分析した。ただし、共通語／方言形式が必ずしもそれぞれの標識を担うとは限らない）。

本節でみる丁寧形式は、阿部（前掲）の中年層・本稿のSAともに上記の(C)タイプであり、方言形式とは共起することがない。また、丁寧形式は他の(C)タイプの形式とは以下の点で異なったふるまいをみせる。

- (i) 隣接する形式だけでなく、離れた形式に対しても影響力を持つ。つまり、直接接する形式だけでなく、離れた形式も共通語形式が選択される。
- (ii) 影響を受ける側の形式が(B)タイプの方言形式であっても共起できない。つまり、丁寧形式が使用された発話では他の文法形式も共通語形式が選択される。

表4に、丁寧形式が使用されている発話（便宜的に意味的な句切れを1発話とする）と丁寧形式が使用されていない発話における有声／無声の分布を示す。

〔表5 YFにおける丁寧形式／非丁寧形式の有声／無声の分布〕

	無声	有声	計
丁寧形式	45(84.9)	8(15.1)	53
非丁寧形式	99(60.7)	64(39.3)	163
計	144	72	216

()内は%、横の合計が100% [$\chi^2=9.454$ $p<.002$]

表のように、非丁寧形式が使用された発話における無声子音率（60.7%）に比べ、丁寧形式が使用された発話での無声子音率（84.9%）が高くなっており、丁寧形式が使用された発話では無声子音へ切換えられやすいことがわかる。

以下の〔1〕は丁寧形式があり無声子音が選択されている場合、〔2〕〔3〕は丁寧形式が使用されず有声子音が選択されている場合である。

〔1〕 丁寧形式あり

052SA: 今一 《{ちやく}{しよく}一》、《{ちやく}{しよく}》に一、手間《かかる》《わけ》です。

〔2〕 丁寧形式あり

097YI: あ一一。それが何月ぐらいですか。

→098O: それが 花《さけば》 すぐ、すぐ《とりかかる》《わけ》です。

099YI: あ一一。で、後は その実が お一きくなるのを みまるとゆ一。

→100O: それ、それでも やっぱり まだ《おとす》《{と}{こ}》ある《わけ》です。

〔3〕 丁寧形式なし

208SA: ん一と、あの 《むご一》に いるの《ど》 だいたい おなじよ一な 《さがな》だ。

表4のように丁寧形式と有声化現象の切換えは関連しているが、無性子音率は84.9%であり、文法形式の共起関係のようなカテゴリカルな選択とはならない。有声化現象と丁寧形式の共起が、文法形式同士の共起と異なることは、音声・音韻項目である有声化現象と文法形式に対する意識化のしやすさといったこととも関連していると思われる。有声化現象の切換えは66.7%であるのに対し、文法形式の切換え率は(頻度数が確保できる項目では)90%を超える。この文法>音声・音韻といった切換えのしやすさは、国立国語研究所(1953)に見られる方言の共通語化のスケールと一致する。このことから、共通語への切換え能力には、方言の共通語化と同様の普遍的なメカニズムが働いている可能性が伺える。それは音声・音韻項目への意識化が文法形式ほどは可能ではないために、共通語化・スタイル切換え・共起制約の働き方が共通した現象となると考えられる。

4.2.2. 方言的な文構造の切換えとの共起

前節では(C)タイプである丁寧形式と有声化現象における有声子音の共起関係がスタイル切換えと関連することをみた。本節では、(B)(C)タイプである方言要素と有声子音の共起関係について分析する。

ここも結論から述べると、方言形式もしくは方言的な文構造が用いられた場合、つまり、共通語形式もしくは共通語と同様の文構造への切換えが行なわれない場合には、有声化現象でも切換えが行なわれずに無声子音が選択される。

文末詞「かな」「か」は、「かな」「か」は6例:18例と有声が多いのだが、共通語「ではない」に後接する場合に、「ではない」の部分が方言形式「デネ(一)」であれば有声となり、共通語形式「じゃない」の後では無声となる傾向にある(ただし、有声も1例ある)。

ここで「か」を例にとると、阿部・坂口(2002:17-18)で述べたように、SAにおける方言「デネ(一)ガ」と共通語「ではないか」の切換えには以下のような二つの類推過程と、図1のような切換え順序が考えられる。

まず、類推過程として、

- (1) 当該方言には助詞「は」を介する否定構文がない。しかし、「は」を介して(ただしジャ)

方言の文構造		共通語の文構造
デ+ネ(一)+ガ	→	ジャ+ナイ+カ(ガ)

とする場合と、

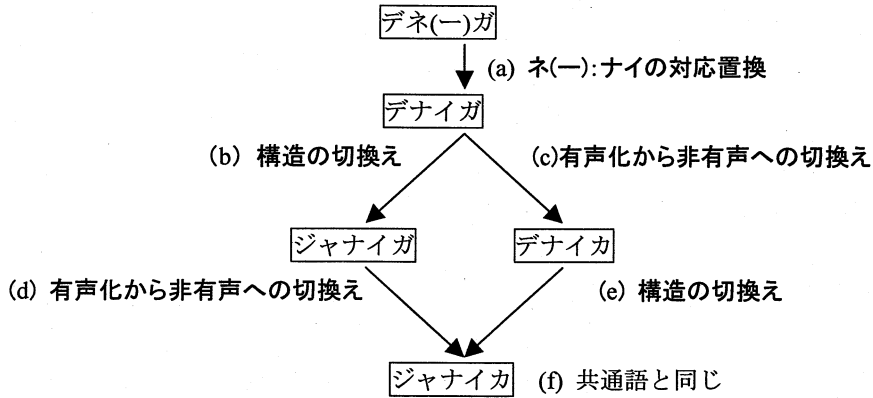
- (2) 助詞「は」を介さない方言の構造のまま(動詞は「書く」で代表させる)、

カカネ(一):カカナイ=デネ(一)ガ:X

X=デナイガ

とする場合の二つが考えられる。また、以下のような切換え順序を予想として挙げた(阿部・坂口2002:18を加工したもの)。

〔図1 ではないか第2類の切換え方(予想図)〕



SAの方言「デネ(一)ガ」と共通語「ではないか」の切換えは表6のようになる。

〔表6 SAにおける「ではないか」の分布〕

	対老	対若	対調
ジャナイカ	-	-	2
ジャナイガ			4
デナイガ	-	-	1
デネ(一)ガ	-	8	-

*1 SAの談話で使用されたのは「ではないかⅡ類」(田野村1988)のみである。「ではないかⅡ類」は体言相当のものに接続し、推定を表現するものである。

表と図を合わせて考えると、対若年層場面では「デネ(一)ガ」のみであり、対調査者場面では「ネ(一)」と「ない」という形式を対応置換させる場合(=a)、有声化現象は切換えずに文の構造を切換える場合(=b)、共通語と形態的にも音声・音韻も同じ場合(=f)に切換えている。つまり、文構造を切換えずに有声化現象を切換えるもの(=c)は見られず、したがって、有声化現象を切換えてから文構造を切換えるもの(=e)もない。

このことから、方言「デネ(一)ガ」と共通語「ではないか」の切換えと、有声化現象の切換えの間には、文構造が切換えられるか否かといったことが関連しているといえる。

また、方言「デネ(一)ガナ」と共通語「ではないかな」の切換えでも同様の結果が得られる。以下に、文構造が切換えられた場合の発話例を挙げる。

〔4〕

108SA:ソ一。《だから》《やくざい》は 今 15、6回《かける》んじやない《かな》。

[5]

160SA:それは ならの木 じゃない《かな》。

[6]

162SA:あの一、んーと、んー、ならの木って あの一、どんぐり なる 木 じゃない《かな》。

[7]

218SA:おら 大体 にじゅー 二十歳くらい なるまで いであつたんじゃない《かなー》。

なお、ここでは文構造と音声・音韻項目の文体的な共起関係をみたが、音声・音韻レベル同士の文体的な共起に制約があることは Auer (2000) でも確認されている。当該地域においても音声・音韻項目同士の関係(母音の広さと有声化現象など)でもあり得るのだが、母音に関しては未分析であり今後の課題としたい。

4.2.3. 形態素の種類

SA の有声化現象の切換えは、内容形態素か機能形態素かといった形態素の種類によって切換えやすさに違いが見出せる。

対調査者場面では内容形態素に比べ機能形態素が有声で実現される割合が高い。内容形態素は 21.9%が有声であるのに対し、機能形態素は 41.6%である (4%水準で有意差が認められる)。

[表 7 対 YF における形態素別の有声/無声の分布]

	無声	有声	計
内容形態素	71	20	91
機能形態素	73	52	125
計	144	72	216

()内は%、横の合計が 100% [$\chi^2=8.263$ $p<.004$]

この結果は Myers-Scotton (1993) のように、内容形態素 (あるいは内容語) と機能形態素 (あるいは機能語) の区別が、当該方言の有声化現象の切換えにおいても制約として立てられる可能性を示唆しているかに見える。しかしながら、阿部 (印刷中) で対象とした中年層話者では、Poplack (1980) の Free Morpheme Constraint のように、自由形態素と拘束形態素の区別が切換えを左右する要因として分析された (拘束形態素が切換わりにくい)。この SA と中年層話者の違いは、動詞・形容詞等の語幹が有声/無声のどちらで実現されるかに還元される。つまり、SA は動詞・形容詞等の語幹を表 7 のように、語幹以外の内容形態素と同程度に切換えているために内容形態素と機能形態素の分類が分析の際に有効となり、中年層話者では動詞・形容詞等の語幹を切換えずに有声で実現しているために (活

用のパラダイムに関わる形態素は切換えないために)、自由形態素と拘束形態素の区別が有効となったのである (SA が中年層話者よりも切換えている／切換えられるのは、SA は出稼ぎのため外住歴があり、中年層話者に外住歴がないことから説明が可能であると思われる)。

[表 8 YF との談話における内容形態素の内訳 (語幹／語幹以外)]

	無声	有声	計
語幹	22(78.6)	6(21.4)	28
語幹以外	49(77.8)	14(22.2)	63
計	71	20	91

()内は%、横の合計が 100%

以下に若干の発話例を挙げる。なお、発話の下段に形態素の種類 (内容／機能) と、有声子音か無声子音か (有／無のように表記) を記す。

[8]

038SA: んーと、《たかさ》わー、《たかさ》わ 30 センチ ぐらいで(YF: えん、長さわ、どのぐらい、

内容・無 内容・無

なるの《が》。

機能・有

[9]

086SA: 《むかし》わ あの 筆で あのー、直接《つけだ》んだけど。

内容・無

機能・有

[10]

032SA: 《うち》では 《はこ》数、《はこ》って あのー(YF: えー)りんご《はこ》数ってゆー《がなー》

内容・無 内容・無 内容・無

内容・無 機能・有

4.2.4. モニタリング

本節では発話に対する注意と切換えが関連しているものについて分析を行なう。まず、以下に発話例を挙げる。

[11]

033YF: どれ、普通の林檎の箱ですか？

→034SA: んー(YF: えー)《きばこ》。

[12]

043YF: あー。市場は どこー、青森市ですか、弘前市。

→044SA: 《ひろさき》。

[13]

091YF:あー、大変な 作業ですね。何時間ぐらい、一日ずーっと やっても、かなり かかりますね。

→092SA:《かかる》、《かかる》。

[14]

155YF:あー。私が 住んでる 辺りは あんまり 雪が 降らないので めずらしーんですけれど。へー。この ストープは 薪の ストープ なんですか。

→156SA:これは《まき》の ストープ。

[11] ~ [14] で無声となるのは、これまで述べてきたように、内容形態素であることのほかに、

- (a) 発話の長さが短く (典型的には一語文)、切換え対象となる形態素・語が少ないこと
- (b) 直前の YF の発話に同じ形態素が存在すること

も考えられる。(a) は発話に対する注意度との関係、(b) はアコモデーションによるとも考えられるのである。

津軽データはプロジェクトの概要に沿って特に話題を設定することをせず、話題の展開については談話の当事者に任せた。したがって、SA にとっては談話全体の計画 (グローバルな計画) はない。しかしながら、当該の言語変項に対する注意は、個々の発話にも向けられると考えられる。このローカルなレベルでの計画、あるいは注意をここではモニタリングとよぶことにする。

すなわち、上の [11] ~ [14] は、短い発話であるために発話に対するモニタリングが容易く、計画通りに無声で実現されたとも考えられる。

以下のような切換えるべき形態素・語が多い場合に、有声が連続して実現されることから、モニタリングをかける発話の長さや切換え対象の数が影響している可能性は否定できない。

[15]

134SA:んー。前、そ、《そご》の 《うち》さ あった 《がら》。(YF:あー)この 《うち》《た{で}{で}》
《がら》 二十何年 なるんでね《が》。

[16]

068SA:ヤー、《わたし》 《さぎ》なッ、《さぎ》に たって 先頭に たって やってない 《がら》
(YF:え)今は あんまり 《わがらない》けど。

また、[11] ~ [14] のようなタイプでは、直前の YF の発話は質問であることが多い。

(a) (b) は言語内的な要因、(c) は外的要因となる。本発表では出現数の問題から扱うことができなかったが、津軽方言話者(中年層)の分析では、以下のような点が明らかになっている。今後、補充調査も行いながら、以下の点についても考察する予定である。

((1) = (b) の課題、(2) (3) = (c) の課題)

- (1) 形式名詞的な「とき」「ところ」は第1子音、第2子音ともに有声可能で、実際の方言談話では有声で実現されるが、共通語(を目指した)談話では第1子音が無声、第2子音が有声に切換わる。つまり、形態素境界への意識が働いていると考えられる。つまり形態素境界が存在するもの第一子音は切換えやすく、形態素境界がない第二子音は切換えにくいのである。内容形態素/機能形態素といった区別(本稿のSA)と自由形態素/拘束形態素の区別(津軽方言中年層)の違いについての分析が必要である。
- (2) 直接引用発話では、発話者あるいは相手が津軽方言話者である場合は有声、発話者あるいは相手が非津軽方言話者である場合には無声で実現される。つまり、誰が(直接引用発話の)話者かといった発話レベルへのモニタリングと関連していると思われる。
- (3) 話し相手が知らないと思われる語(固有名詞であることが多い)を初めて使用する場合には、(その語に限って)無声で実現される。つまり、語レベルへのモニタリングと関わると考えられる。

また、§4.2.4.のモニタリングは数量的に分析することが不可能である。このような現象を扱う際の分析枠についてはさらに検討する必要がある。

なお、既に述べたように、SAは調査者との談話では共通語を用いようとし、目標とするが、切換えられない要素や環境が存在する。言うならば中間方言である。しかしながら、その体系は可変的である可能性を持っている。この言語習得の観点から、本節の(1)の課題も解明できるかもしれない。つまり、共通語という目標変種を目指したスタイルにおける共通語能力とともに、共通語切換え能力が関わっている可能性があると考えられる。また、今回とりあげなかった文法項目には切換えにあずかる項目と切換えの対象とはならない項目がある。これが何によって決まるのかといった点も興味深い。両者の解明を目指していきたい。

【注】

- 1) 当該地域の中年層を対象とした阿部（印刷中）でも同様の結果が得られている。
- 2) 有声化現象は有声母音間にある無声子音を有声化させることで声帯振動を持続し、発音の負担を軽減するために起きたと考えられている（井上 1980）。前接する母音が無声であるため、有声にする必要がないということであろうか。

【参考文献】

- 阿部貴人（2001）「青森県弘前市方言話者の標準語スタイルの記述 —コード切り替えの観点から—」大阪大学大学院文学研究科修士論文
——（印刷中）「音声・音韻レベルの切り替えについて」『待兼山論叢』36号 日本学篇
- 阿部貴人・坂口直樹（2002）「津軽方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』
4 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 井上史雄（1968）「東北方言の子音体系」『言語研究』52
——（1971）「ガ行子音の分布と歴史」『国語学』86
——（1980）「言語の構造の変遷 —東北方言音韻史を例として—」柴田武（編）『講座言語
第1巻 言語の構造』大修館書店
- 国立国語研究所（1953）『地域社会の言語生活 —鶴岡市における実態調査』
- 此島正年（1968）『青森県の方言』津軽書房
- 斎藤孝滋（1992）「岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象 —言語内的・外的要因の
観点から—」『国語学』168
- 佐藤和之（1986）「若年層話者に見る津軽方言の記述的研究(上)—録音文字化資料からの抽出—」
『弘前大学国語国文学』8号
- 渋谷勝己（1998）「漱石のスタイルシフト」『待兼山論叢』第32号 日本学篇 大阪大学文学
会
——（2002）「プロジェクトの概要」『阪大社会言語学研究ノート』4 大阪大学大学院文
学研究科社会言語学研究室
- 清水克正（1999）「日英語における閉鎖子音の有声性・無声性の音声的特徴」『音声研究』第3
巻 第2号
- 田野村忠温（1988）「否定疑問小考」『国語学』152
- 渡辺修平（1984）「青森県黒石市方言の音声現象について —共時論の視点から—」『弘学大語
文』10号
- Auer, P. (2000) "Co-occurrence restrictions between linguistic variables: a case for social dialectology,
phonological theory and variation studies." Frans Hinskens, Roeland van Hout and W. Leo
Wetzels (eds.) *Variation, Change and Phonological Theory*, (Current Issues in Linguistic Theory
146,) John Benjamins

Myers-Scotton , C. (1993) *Duelling Language: grammatical structure in codeswitching.*

Oxford:Clarendon

Poplack , S. (1980) "Sometimes I'll start a sentence in Spanish Y TERMINO EN ESPANOL" ,

*Linguistics*18: 581-618

あべ たかひと (大阪大学大学院生)

abet@wombat.zaq.ne.jp